

か

さこじぞうみたいにある程度読み応えのある物語は、どの学年にも置かれていて、研究授業でよく取り上げられる。物語をどう教えたものか、ぼくはついにつかみ損なってしまったが、人の授業を見てみると、こうすればよかったかもなあと思やむ一方、いつしよに読むつてやつぱり楽しいなあと思う。

三年生の国語には、『サーカスのライオン』という話が載っている。サーカスの火の輪くぐりを生業としながらも、年老いてやる気を失ったライオンが、少年と出会って再び気力を取り戻す物語。しかし、蘇った気力は少年を火事から救い出すことにすべて注ぎ、彼は命を失う。

四年生は、おそらく小学校の国語教材では支持率ナンバーワンだろう新美南吉の『ごんぎつね』。この間、中堅男性教員の授業を見た後、二人で少し話をした。

「前は、俺が最初に朗読すると、子どもたちが泣きよつたんです。」

「うん。最後の場面は、読んでるこつちまで泣きそうになるもんね。」

「そうなんです。でも、今の子、泣きやあしませんよ。」

彼の意見をそのまま肯定したものかぼくにはよくわ

からないが、物語の方は何十年と変わらずとも、受信機側は時代とともに変わっていつて当たり前で、ゲームやアニメに常々同期している子どもたちにとって、これらの物語など古典落語や講談みたく、少々波長を合わせるのに手間取るのかもしれない。

『サーカスのライオン』にしても『ごんぎつね』にしても、ラストは主人公が死んでしまう。作者は、命を奪わなければ、物語を結ぶことができなかったのだから。ごんがどんなに祈りを込めて栗や松茸を兵十に捧げたとしても、命まで捧げなければ埋め合わせることはできないし、ライオンが再び命を燃やす喜びを得るには、同時にそれを失わなければならないのだ。それが物語のお約束、物語の真実。

ちなみに六年生では、命のやりとりを回避する物語が登場する。こうなると、思想とか宗教味が加わってくるので、教員によっては、

「あれは、無理。教師を選ばね。俺には教えられない。」

などと投げやりになる人がいる。おもしろい。授業を見ながら、ごんを撃ち殺した兵十を非難する声や、ライオンが死ぬのに納得がいけない、という意見がまったくないことに気づいた。今の子どもたちも物語のお約束にしっかりと身を委ねているようだ。



専業ババ奮闘記(その2) 28

木幡智恵美

虫博士 (3)

「ババ、蛹が蝶になったよ」と、寛大が報告してくれたのは、蛹になったと聞いてから二週間後の週末だった。二匹羽化したとのことだ。

蝶の羽化には、苦い思い出がある。寒い時季に、キアゲハの幼虫を捕まえてしまったのだ。コップにパセリを挿し、そこに乗せていたら、いつの間にかいなくなっていた。ある時、食器棚に蛹が引つ付いているのを見つけたが、この時季に羽化することはないだろうと思つて放つておいた。すつかり忘れていた頃、何と、キアゲハがばたついているではないか。台所には暖房を入れているので、春を待たずに羽化してしまつたらしい。寒くて外に放すことはできず、仕方なく花瓶にとまらせていたら、花瓶の中に落ちて溺死していた。捕まえて家の中に入れたりしなきゃ、蛹で冬を越したことだろうに。余計なことをしたばかりに、数奇な虫生を送らせてしまった。

寛大に、「蝶はどうした」と聞くと、すぐに外に逃がしてやつたという。この時季なら大丈夫だ。いい相手を見つけ、子孫を残し、真つ当な虫生を送ってくれることだろう。

その日は実歩も散歩に行くといつので、大きなお腹の娘も付いてきて、四人でいつもの公園に向かった。捕まえたのは、キチョウ一匹とカマキリ一匹。それも、一旦は虫かごに入れ、すぐに逃がした。もう十一月、虫捕りもそろそろ終わりだ。我が長男は、虫がいなくなると、年ごとにマイブームにはまつた。川崎病疑いで入院した四歳の冬は飛行機で、病室に小さいテールを持っていき、その上にスケッチブックを広げ、飛行機の絵を描いていた。五歳の冬は鳥。婆ちゃんにザルをねだつていたのは、毘をしかけて鳥を捕まえるつもりだったようだ。寒い中、鳥を眺めに何度も宍道湖に連れて行かされた。六歳の冬はウルトラマン。どれもこれも、「飛ぶ」ものだった。さて、寛大は、この冬何にはまるのだろうか。

保育所の生活発表会に誘われ、ジジババも見に行った。グループごとに、技を披露したり、発表したり。寛大はT君たちと、眼鏡をかけた虫博士に扮していた。

30代フリーター やあ、ジイさん。日本学術会議が自分たちの推薦した会員候補の任命を総理大臣に拒否され、それに異議を唱えたら、そっちにも問題があるからと組織のあり方の見直しを約束させられた経緯は、レイプの被害者が、そっちにも落ち度があるじゃないかなどと言われて、さらにダメーじを受けるセカンドレイプに似ている。

年金生活者 朝日新聞は「井上信治・科学技術担当相が23日、学術会議が自ら政策提言などの課題を検証するよう要請し、梶田隆章会長が年内に報告することと合意した」と報じ、肝心の任命拒否の理由の説明と拒否の撤回に担当相は応じなかったと伝えている（10月24日朝刊）。けんかのプロのやくざのようなやり口によるこの返り討ちは、学術会議にとって屈辱的な体験として深いトラウマとなり、政権に抵抗する力を削がれた可能性がある。

飲食店などで苦情を言ったら、こっちの落ち度を指摘するような対応をされたことが一度ならずある私は、それ

30代 宇野のそうした考えを認めるとしても、あとの5人が任命拒否を批判したのは当然のことだろう。

年金 5人と宇野の違いは、自分をどのポジションに置くか、その選択の違いから来ている。5人が学術会議という組織の中に自らを置いて発言しているのに対し、宇野は一研究者、一学者としてのものを言っている。

総理大臣が任命を拒否した相手は、会員候補を推薦した学術会議であって、推薦された6人ではない。したがって、任命拒否を批判した5人はおのずと学術会議という組織の一員というポジションにわが身を置いたことになる（組織内での肩書の有無にかかわらず）。

ただし、5人は組織の一員というだけでなく、任命されなかった当事者でもある。それが任命拒否に異議を唱えれば、自らの任命を政府に求めていることになる。それは学術会議が組織として任命拒否の撤回を求めるのとは性質が異なる。一研究者、一学者が自ら

を思い出すたびに痛みと屈辱を覚える。その経験を延長して学術会議の屈辱を想像すると、菅政権の手ごわさをあらためて感じる。モリカケやサクラで逃げまくっていた安倍政権はそのぶんまだ可愛げがあったが、逆襲に出て来た菅政権にはそれがまったくない。

30代 学術会議の会員の任命を拒否された6人は外国特派員協会ですらって意見を表明したと報じられている（10月24日朝日新聞朝刊）。このうち5人は任命を拒否した政権を批判しているのに対し、宇野重規だけは「内閣によつて会員に任命されなかったことについては、特に申し上げることはありません」と言っている。「日和（ひよ）つている」と受け取った左翼もいるんじゃないか。

年金 宇野は文書で寄せた見解の中で、会員に推薦されたことを感謝し、「これ以上の名譽はありません」と述べている。自分の学問に対する評価は学問の専門家だけがなし得る。それは総理大臣にはできないことだ。だから

の地位の保障を国家に求めることを意味するからだ。研究者、学者というのは組織によつて与えられる属性ではなく、自らの研究の実践によつて保持される属性だ。地位の保障を国家に求めれば、研究者、学者としての本来のあり方とは異なるあり方を目指すことになる。

こそ任命は「形式的」（1983年の中曽根康弘の国会答弁）であり、そんなことについて当事者としていちいち言うことなどない。彼はそう考えているように受け取れる。

「これまでと同様、自らの学問的信念に基づいて研究活動を続けていく」という彼の言葉は、「学術会議のメンバーに入らなくても学問はできるのだから学問の自由の侵害になるわけがない」という橋下徹の批判を退ける確固とした応答となっている。

宇野は少数派の存在なしに民主主義が成り立たないことにも触れている。選挙で多数派になったからといって、少数派を抑圧していいわけではない。少数派には多数派を批判する権利がある。そのことを彼は「民主的社会の最大の強みは、批判に開かれ、つねに自らを修正していく能力にあります」という言葉に込めているように見える。学術会議が政府を批判することも当然あり得ることを前提にしなから。

30代 政府への抗議を広げるためには、それもやむを得ないんじゃないか。

年金 戦い方は自由だ。だが、任命されなかった者による任命の要求は「学問をするのにそんなに国家のお墨付きが欲しいのか」といった批判を許してしまうことを避けられない。そしてその批判は少なくとも国民の共感を呼ぶはずだ。つけ加えておくと、学術会議そのものは学問をする主体ではないから、任命拒否の撤回を政府に要求しても、その種の批判は的外れでしかない。

宇野のとつた態度は、そうした批判を許すような弱点をあたう限り払拭している。彼は政権の決定を批判していないが、だからといって、それを肯定しているわけではない。学者、研究者であり続けることに政府や国家の保障を求めることを拒否するを通して無言の抵抗をしている。それは学者としての本来のあり方に立脚した戦い方とすることができる。

ニュース日記 760  
中村 礼治

## 学者の戦い方